

しのはら歴史便り

篠原地区歴史同好会／浜風会会報 No.7

郷土の歴史を学ぶ と「いっぴん」と

郷土の歴史を学ぶということとはどういう意味があるのだろうか。

平成十七年七月一日は「新浜松市」の誕生日

浜松市にとって市制記念日のこの日が、また歴史的な日となった。このように私達の周りでは、様々な変化が起こっている。それは私達の生活にもいろいろな形で影響してくる筈である。私達はその歴史の変化を正しく捉え、今後の生き方を学びたいものである。

私達の住んでいる位置関係を知る

郷土の歴史を学ぶということは、私達のふるさと篠原地区がどういう経過で現在があるのか、また周りの地域との関係でどういう繋がりがあるのか、その位置関係を知ることだと思う。

昔からこの地域には海からの伝説がいっぱいある。提供いただいた旧庄屋宅からの古文書から、新しい発見がいろいろ出てきた。その都度近くのお宮が、お寺が又街道が生き生きと見えてくる。更に本当のことがわかりたい。



新「浜松市」市章デザイン

私達の地域を住みよいものにする

私達誰でも、住み慣れた地域が好きになると、また誇りに思えることは幸せなことである。この篠原地区の特長は、前浜と街道と玉葱である。中でも前浜は昔から、住民の心のふるさととしてかけがえのない所である。

白い砂浜、松の緑、そして青い海と恵まれた自然。この頃風紋も毎日表情を変え、浜が大変きれいになった。みんなの心掛けのお陰だ。

おそろしくこれ程の浜は、全国的にみてもあまり無いだろう。それだけにここに住む者としてみんなを守って行きたいものである。それは一人一人が、歴史を担っているのである。

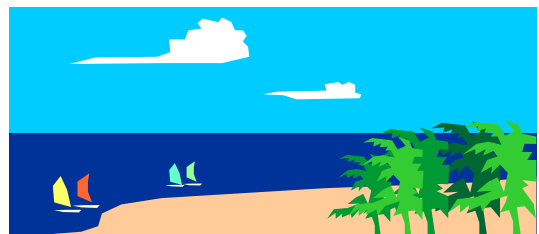
今、歴史認識が問題になってくる

地域とは違つが、国の歴史については、一筋縄ではいかない。思わしい過去が絡んでいるので、難しい問題が常に内在している。情勢の変化や、何かのきっかけで暴発してしまう。

それは歴史教育が絡んでいっそう複雑にしている。歴史の真実は一つだが、立場が違えば全く違う認識になってしまう。歴史とはそういうものだろう。このことを承知して、相手の立場にたつての慎重な付き合いが必要だろう。地域の歴史だつて同じ場合がある。

浜風会(郷土の歴史を学ぶ会)の平成17年度活動計画

- 郷土の歴史を学び、そして発掘
 - 小テーマをあげ、みんなで話し合い／そして成果発表
- 浜風会会報の継続発行
 - 年2回(7月、1月)
- 山下孝先生の特別講座「世界文化遺産について」
 - 7月21日(木): 那智の補陀落山寺
 - 10月26日(水): 厳島神社と弥山
- 篠原小・中学校への地域歴史の講師派遣
- バス旅行2題
 - 山下孝先生案内バンビツアー: 日程/目的地は後日決定
 - 近郷の文化財巡り: 11月13日(日) / 目的地は後日計画



私達の住む郷土を一緒に勉強してみませんか? 主として第1, 3木曜日/公民館で

篠原地区の行政区について 其の二

前号で、古代、中世について記し、大化の改新により律令制度の仕組みを整え、地方編成を六十余国に分け、その下に郡、里を設けたこと。私たちの地域は、遠江国敷智郡に属してきたこと。中世後期になり、足利一門の今川氏が遠江国の守護となり、領国の支配を強めてきたことなどを述べた。

近世

戦国大名としての今川氏は、十二代義元の時代が全盛であったが、桶狭間で信長の急襲で敗死、これを機に松平元康（徳川家康）は、三河の岡崎に独立し、信長と連携し、天下人への道を歩き始める。

三河を統一した家康は、三河の守に任ぜられ、永禄十一年（一五六八）三河から遠江攻略に乗り出した。引馬城、更に掛川城を攻め、これを手に入れる。一方、堀江城（館山寺の大沢氏も抵抗したが敗れる。こうして遠江制圧は永禄十二年（一五六九）末までに終わる。

家康は、拠点を見付（現磐田市）にと思ったが、信長の意向で引馬城を根拠地と決め、元龜元年（一五七〇）に入城した。この時引馬を浜松と改めたといわれる。やがて天正十四年（一五八六）駿遠甲信三の五か国領主として駿河府中に移るまでの十七年間浜松城主として、在城

江戸時代の領主と石高（参考図書 地名辞典他）

篠原村	坪井村	馬郡村
浜松藩 松平忠頼郷村帳 高七六五石 浜松藩 水野重伸知行割帳高七九八石 寛永二年（一六二五） 旗本服部領 五四七石 正保郷帳 幕府領と旗本服部領	浜松藩領のち 幕府領 正保郷帳 高九二石 幕府領	浜松藩領のち 幕府領 正保郷帳 高一四〇石 幕府領
享保郷村高帳 幕府領と三河吉田藩領 旧高旧領取調帳 幕府領 一四二五石 三河吉田藩領 三五石 元禄郷帳 一四〇〇石 幕府領と浜松藩領	享保郷村高帳 旧高旧領取調帳 幕府領 元禄郷帳 高一五二石 幕府領と浜松藩領	享保郷村高帳 旧高旧領取調帳 幕府領 元禄郷帳 高三二石 浜松藩領

することになる。家康が二十九才から、四十五才の活動期であった。

やがて江戸時代になると、私たちの地区は、幕府領、浜松藩領、旗本領などとなるが、時代によって変遷があった。詳しいことは分からないが、右の表の篠原地区についてみると、江戸時代初期の浜松藩主松平忠頼、水野重伸のときは浜松藩であった。次の藩主高力忠房の寛永二年（一六二五）には、石高のうち五四七石が旗本服部領で、両者の相給となっている。なお旗本の服部氏は大久保に陣屋があった。いずれにしても、篠原地区は幕府領が多かった。幕府領

廃藩置県へと明治維新（これあらたなり）の改革が進められていく。

は天領とも言い、中泉（現磐田市）に代官所があり、その支配下にあった。篠原地区の石高は少しづつではあるが、多くなっていることが分かる。時代が移り、幕末の大政奉還、そして明治と改元、版籍奉還、

歴代浜松城主一覧表

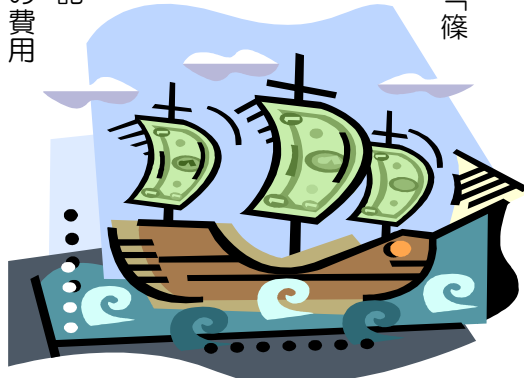
（主として「寛政重修諸家譜」「徳川実紀」による）

城主名	在城期間
・徳川家康	元龜 1—天正 14(17年)
・(菅沼定政領城)	天正 15—18(4年)
・堀尾帯刀吉晴	天正 18—慶長 4(9年)
・堀尾信濃守忠氏	慶長 4—5(2年):計 11年
・松平左馬亮忠頼	慶長 6—14(9年)
・水野対馬守重仲	慶長 14—元和 5(11年)
・高力攝津守忠房	元和 5—寛永 15(20年)
・松平和泉守乗寿	寛永 15—正保 1(7年)
・太田備中守資宗	正保 1—寛文 11(28年)
・太田摂津守資次	寛文 11—永宝 6(8年):計 35年
・青山因幡守宗俊	延宝 6—延宝 7(2年)
・青山和泉守忠雄	延宝 7—貞享 2(5年)
・青山下野守忠重	貞享 2—元禄 15(18年)計 25年
・松平伯耆守資俊	元禄 15—享保 8(21年)
・松平豊後守資訓	享保 8—享保 14(7年)計 28年
その他 11 城主	享保 14—明治 1(140年)

篠原村の年貢

御廻米の記録

幕府領であった篠原村の年貢米は新居宿の今切湊から積出され、江戸の浅草にある幕府の米蔵や、駿府城に納められた。江戸へ送られた年貢米は「城米」と呼ばれ、換金して幕府の財源としたり、そのまま旗本・御家人などの俸禄に充てられた。また駿府城へ送られた年貢米は「駿府詰米」といい、兵糧米・備荒米として備蓄された。



文政三年（一八二〇）の「篠原村入用帳」（鈴木七兵衛家文書）に「銭五十貫百七十六文 如此御座候御廻米入用 江戸駿府共」という記述がある。村入用は村の運営に必要な諸経費のことで、村人が負担した。村入用帳に記された金額は年貢米回送の費用である。なお、同七年は「五十七貫五百文」、同十二年は「六十八貫文」と記されている。廻米手続き 幕府代官は積出し予定日を定めると、今切湊から城米積出しを行う支配下村々へ日程を通知した。積出し予定日の前日になると、廻船への積込

みを取り仕切る代官手代が新居宿へ出張してくる。翌日、村々から送られてきた城米を閩所の裏門から一旦小型の瀬取船へ載せ、それから城米船へ積込んだ。

積出しの記録 鈴木七兵衛家文書に御廻米の記録が五ヶ所みられ、そのうち「卯十一月八日廻状写」には、江戸、駿府御廻米として二百二十七石八斗九升八合を二十三日までに新居（今切）湊へ送ることが記されている。

この年度は不明だが、捺印が名主長太郎であり、また別の文書に

名主七兵衛との連名の箇所が確認されるので、江戸後期の文政二年己卯（一八一九）か天保二年辛卯（一八三二）かのどちらかと考えられる。この年は、江戸八・駿府二の割合で送られた。

城米回送の量 『新居町史』（第一巻）には今切湊の城米積出し湊としての機能、所属の廻船・村々の積出し高等について分かりやすく記述されている。それによると、篠原村の記録がみられるのは宝暦五年（一七五五）の「城米三百二十三俵から」である。

弘化三年（一八四六）から慶応三年（一八六七）まではほぼ連続して積出し俵数が記録され

ている。篠原村以外に宇布見村、白須賀宿等の数ヶ村の様子がわかるが、篠原村の積出しが最も多い。千俵以上積出しした年を挙げると、表のようになる。

今切湊からの城米総積出し量に対する篠原村の占める割合は、四割強となっている。

嘉永七年（一八五四）の五百二十八石は俵数に換算すると千四百余俵で、最高値となる。篠原村の村高千三百五十石から見ると、村高の三

弘化3年	1,014 俵
嘉永元年	1,097 俵
3年	1,020 俵
5年	1,240 俵
6年	1,298 俵
7年	528 石
安政3年	1,076 俵
4年	1,084 俵
6年	1,018 俵
慶応3年	1,098 俵

十九%に当てる石高である。嘉永七年の積出しは、い

安政東海地震の起こる少し前のようであった。地震と津波により湊も周辺の村々も大きな被害を受けた。そのため、翌安政二年の積出しの記録はない。

安政五年（一八五八）及び万延元年（一八六〇）の積出しの量は半減もしくはそれに近く、周辺の村々も減少している。不作になる何らかの要因があったことが想像される。

ハワイ島小学校訪問

私はこの程、ハワイ島の小学校を訪れる機会を得た。在住する娘家族から「一度来て」と言われていたので、保養のつもりで出掛けた。数日後、一年生の孫が先生からの手紙を持ってきた。「日本からばあば、じいじが来たようだが、教室へ来ておひな様や端午の節句等、日本の子供の祭りについて話してほしい」との要請であった。母親が長男(三年生)入学時から、一月三十一日午後の一時間目、

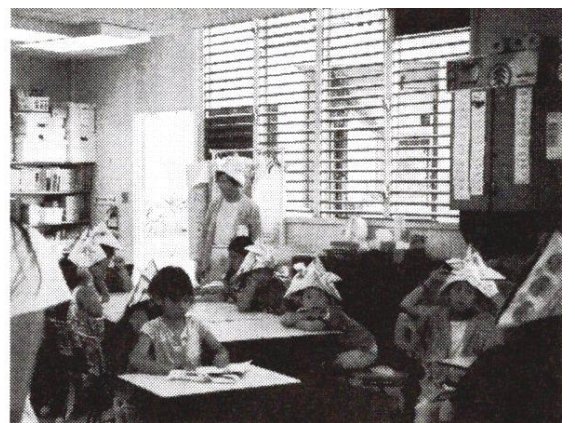
学校でボランティアをしているのと、今回老夫婦が来島したことによるものらしい。孫らの通う学校

今、女性天皇が話題になっているので調べてみました。

(出典：日本皇室大鑑他)

代	天皇	時代	在位年	皇居
三三三	推古天皇	飛鳥	三二六	豊浦宮 小懇田宮
三五三	皇極天皇 (重祚)	飛鳥	四	飛鳥板蓋宮 飛鳥板蓋宮
三七	齊明天皇 (重祚)	飛鳥	七	飛鳥岡本宮
四一	持統天皇	奈良	二二	飛鳥浄御原宮 藤原宮
四三	元明天皇	奈良	九	藤原宮 平城宮
四四	元正天皇	奈良	一〇	平城宮
四六	孝謙天皇 (重祚)	奈良	一〇	平城宮 平城宮
四八	稱徳天皇	奈良	六	平城宮
一〇九	明正天皇	江戸	一四	平安宮
一一七	後櫻町天皇	江戸	八	平安宮

小学校訪問、職員室で入校許可証である



「VISITOR PASS」を胸に着けて教室へ行けと言われた。

教室へ入ると担任の女の先生から「アンソニー(孫の名前)の祖母と母親です。今から日本の子供のお祭りについて、お話をしてみたいです」と話したようだ。鯉のぼり三本を黒板の隅へ立て掛けて「オー・フィッシュ」の音が聞かれた。母親が前に出て五分間ほど写真等掲げながら説明する。子供らは新聞紙で折り紙カブトを作るのだが、これがうまく出ない。先生や私達も手伝ってかなりの時間がかかって、やっと出

の感想文が届けられた。
Dear Baba and Jii. We had a special day with you. Thank you.
一行目は、先生が教えたか全員同じ文章だった。五行から十行程で、カブトは難しかった。もち

はつまかったが、中の赤いの(あんこ)はダメだった。と書いた子が一人いた。何人かの子は明日も来てと書いてあった。裏へはクレヨンで書いた自画像が貼ってあった。私達はおおいに感激した。

(袴田巨一)

来上がり全員が頭へかぶった時は、拍手と歓声、笑顔いっぱいだった。そして作ってきた柏餅を二個ずつ配った。食方もわからないので、私が菓をとり、ぱっくりとやると、子供達も食べ始めた。一時間はあっという間に過ぎた。
翌日児童全員から、昨日

浜風会会報第7号
浜松市篠原公民館同好会浜風会
(篠原地区郷土の歴史を学ぶ会)
編集委員 鈴木清 鈴木義雄
鈴木幹久 中山清 山下勝彦
発行責任者 袴田巨一
発行平成17年7月1日
連絡先：篠原公民館気付
TEL053-448-7859